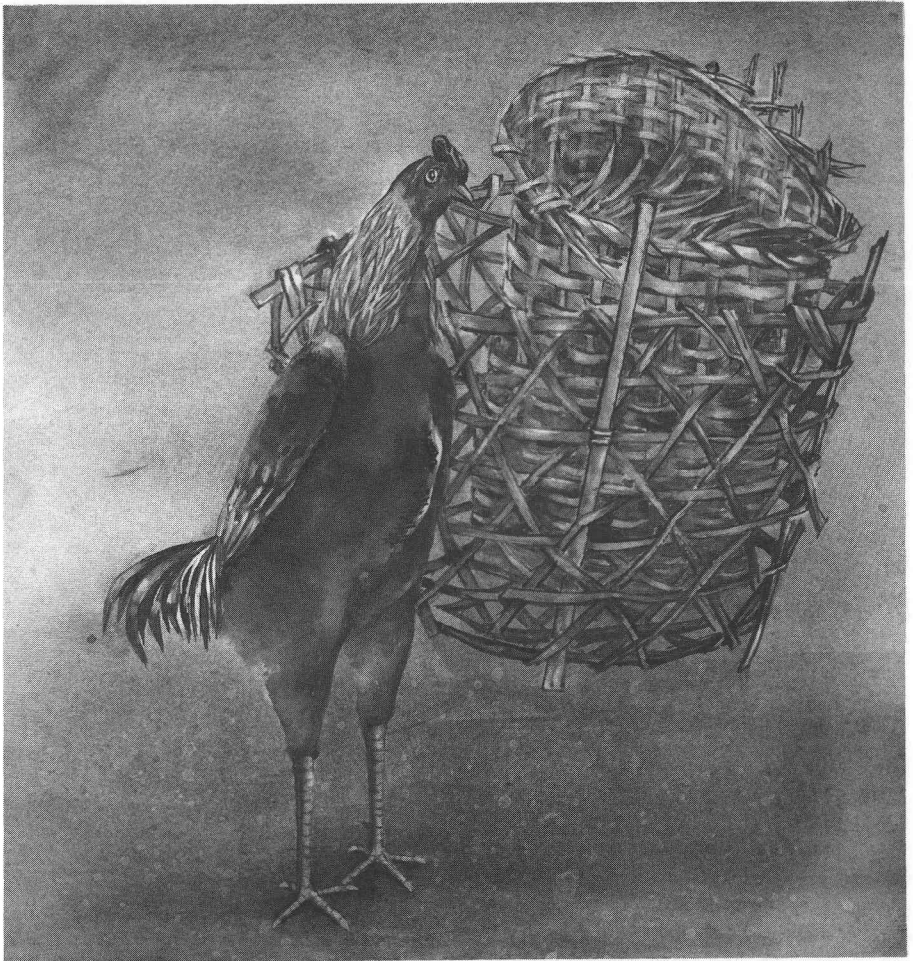


季刊

# 連句

第40号

平成五年三月一日発行



季刊連句 第40号 目次

芭蕉の心法（南柏雑記 38） .....	1
朧夜と朧月 .....	東 明雅 ... 2
歳旦三っ物 .....	4
「灰汁桶の」の巻鑑賞 .....	東 明雅 ... 9
「馬追」付勝練習二十韻 .....	東 明雅 ... 12

第7回国民文化祭 石川92連句大会	文 下鉢清子 ... 14
応募入選作三卷	捌・文 倉本路子・八角澄子・百武冬乃
当日作品七卷	捌 東 明雅・秋元正江・内田麻子・式田和子 中川 哲・福井隆秀・本屋良子

二十韻三卷	捌 松本 碧・佐古英子・山口美恵 ... 21
芦丈翁俳諧聞書（VII） .....	22
百韻「霜月や」	捌 坂本孝子 .....
歌仙二卷	捌 杉江杉亭・式田和子 .....
二十韻三卷	捌 秋元正江・中田あかり .....
新刊紹介 .....	20
雁帛往来 .....	29

芭蕉の心法  
南柏雜記 38  
雅

この号の二十二頁「芦丈翁俳諧問書(Ⅶ)」を読まれる方は、芦丈先生が「芭蕉の心法」というものを、俳諧(連句)の最も重要な理念と考えられていたことに気が付かれるだろう。私は昭和三十六年から四十三年まで、まる七年余、先生の薫陶を受け、鉗槌をいただいたが、その間、心法という言葉を口にされない日はなかったと言つてよい。本当に耳に胼胝が出来るように繰り返し繰り返し教えられた。

ただ、私は不敏でその真意を完全に解することが出来なかつた。現在でも出来ないのである。先生の言われる「芭蕉の心法」とは、付けと転じと両方にあるらしく、付けの方では「あるものは付く、無いものは付かぬ」という心得であり、もう一つは「根を切れ、その続きをいうな」という教えであるように思われる。それは分るのであるが、転じについて、例の「付方自他伝」の方法を絶対とせず、芭蕉様は心法によって自由に付けておられる。自が何句続こうが、場の句が何句続こうが、打越からの転じがしっかりしていればそれでよいのだ」という教えであつた。

私は連句を人にお教える時は、全く芦丈先生の言われた通りを教えて来た。だから、付け方の心法はその通り、

「あるものは付く、無いものは付かぬ」「根を切れ、その続きをいうな」と教えて来たが、転じの方法については、私がまだ芦丈先生に及ばないので、芭蕉は何を規準として心法を使ったか、まだ十分納得がいけない。だから、今まで転じの心法は無視し黙つて来た。これは師に対して不忠実であつたかも知れないが、私としては自分で納得のいかぬことを他人様にお教えることはできないからである。

「付方自他伝」は私の考えでは、その方法は既に貞享のころ芭蕉たちは会得していた。それを元禄二年「おくのほそ道」の旅の途中、北枝に授け、北枝はその後三年かかってうまく整理をしてあのような形になつたのであると思う。だから芭蕉は生前、あの方法を十分会得し、駆使していた。ただ、その方に泥まなかつただけである。

私としても決して「付方自他伝」の方法通りが絶対だとは言わないし、また、自・他・場の句の判別にも相当幅をもたせ、余裕を持たせているつもりである。しかしながら、これほど、手軽に三句の転じの出来る方法を外には知らななし、また馴れたせいとか、一巻の進行にあたって自他場の問題で窮したことは滅多にない。

蕪村や几董などの名人も盛んにこの方法を用いて立派な作品を作つたのである。私は真に「芭蕉の心法」が理解できるまでは、自分も「付方自他伝」を守り、他人様にもこれをお教へして行こうと思つている。

# 朧夜と朧月

東明雅

古典俳文学大系一一「享保俳諧集」を読んでいるうち、次の作品があることを発見した。

朧夜をひとりさめてや梅の花

木の芽も覗く柴垣のひま

柏木の衣紋に猫も恋をして

ひとつ呑ねばならぬ所なり

くまどりに月の出しやうとやかくと

もふ来かゝりてござる聖霊しやうりやう

雲裏坊

朧夜をうごいて見たる柳かな

沉々ちんちんひびく橋の雪水

むらさきの蒲団に馬も二節して

自慢も親の身では尤

月も今盛の辻に踊かけ

西瓜も錦とぼす行灯あんどん

九重の雲に道あり山ざくら

帰り急ぎの雁も追く

豆腐屋の門を朧に出替りて

陸羽  
山紫

南淑

羽

紫

叔

廬長

許三

杏里

きのふ笑ふた顔のはづかし

名月の十六日も七日も

秋の蓮はすの水におさまる

枚文

桃波

池了

右の三作品は、いずれも享保二十一年自序、廬元坊撰の「渭江話」に掲載されているものである。廬元坊は美濃派獅子門第三世、支考の後継者として、生涯を捧げ、美濃派の今日を築いた人である。

私はつい最近「ねこみの通信」第十号の、質問コーナーで、標題に関連した文章を書いたばかりであるが、問題はやや重要と思われるので、この「渭江話」で発見した資料をまじえて再論してみる。

「ねこみの通信」の問答の要点を示すと、「朧夜」だけで月の句として使えるか否かという問に対して、私は七部集の用例をあげて、「朧夜」だけでは春の月を出したことになるらない。必ず「朧月」とか「月朧」と言わなければならないとお答えした。

七部集で「朧」或は「朧夜」だけで春の月に行っている例がないことと、特に「冬の日」・「狂句こがらしの」の巻

の名残の表、折立に「のり物に簾透顔おぼろなる」とあるのに対し、月の定座に「日東の李白が坊に月を見て」という句が存在しているのが、何よりの証拠だと思っていた。だから、冒頭に掲げた「涪江話」の例を見つけた時は本当に嬉しかった。これですくなくとも享保時代の頃までは「朧夜」と「朧月」とを一緒にするようなことはなかったと断言できるだろう。

私は考えるに、享保時代までの歳時記には「朧夜」という季語は掲載されていない。「朧月」と「朧夜」が並んで始めて掲載されている「俳諧小筈」は寛政六年刊であり、「季引節用集」は文政元年の序があるが、この書では「朧月三春」「朧夜同」「朧影同」としてある。このあたりから、「朧月」と「朧夜」の混乱・乃至混同がおこったのではなからうか。角川の「図説俳句大歳時記」は流石に「朧月」と「朧」は別のものとしているが、「朧月夜」は傍題

として「朧夜」をあげ、山本健吉著「基本季語」は「朧月」の項に、「朧夜」・「月朧」・「朧月夜」・「淡月」を挙げ、御丁寧にも、解説文の最後に「朧夜は朧月夜のこと」と明記してある。これでは「広辞苑」や「日本国語大辞典」が同じようなことを書いていても咎めだては出来ないであろう。

このような場合、私どもはどのような態度を取るべきか。「朧夜」と「朧月」、あるいは「朧月夜」があれだけはっきり区別して使われていたのに、ちょっとしたきっかけから誤用されて、同一物と見られるようになってしまった。そして、その誤用が世の大勢を占めている。私はあくまでも、「朧夜」と「朧月」・「朧月夜」の区別を守りたいと思うが、大衆に説いても無駄なような気がする。しかし、すくなくとも猫藁の中では「朧夜」と「朧月」を混同しないようにしたいものだ。

## 全国連句いなみ大会募吟

形式 歌仙 〆切 三月三十一日

932-02 富山県井波町総合文化センター内

全国連句いなみ大会事務局宛

皆さん奮って応募して下さい。

歳旦三つ物

繭玉や惣三階の残る町

花喰鳥の点初の盤

星朧いさり火とほく眺めあて

秋元正江

初茜胡弓弾く音のまぼろしか

樺青く鎮まりし窓

春化粧マドンナのPHOTO傍らに

岩井啓子

久々の日本で浴びる初湯かな  
拾ひし猫の愛称は「独楽」  
アトリエの白蓮の花天向きて

秋元和彦

これからは己れが大事初参り

空に昼月かかる若菜野

鶯の籠を窺ふ猫のあて

市野沢弘子

ねむるごと籠もるさとより年始状  
とりと羽子板児らが描きし絵  
トイバルーンはつ虹の橋わたるらん

浅賀淑代

若菜野の空は晴れたり摘み行かな

淑気凝りたる大盃の酒

移り行く尽きぬ風雅と花の色

岩垂景翠

門松に遊ぶ雀のみえ隠れ

東雲映ゆる桶の若水

父は百母は米寿のお花見に

稲葉道子

東天紅鋭く鳴きぬ初明り

漁始とやとほき舟影

花訪はむ奥の細道果もなし

内田麻子

健やかに重ぬる年や初日の出  
祝ふお雑煮山海の幸

紅枝垂古都の社に咲き満ちて

氏神や家族うちつれ初詣

春衣みせあひ笑顔絶えぬ子

恋猫の妻れも見せず浮かれて

大漁旗笑ふ魚港のお正月

テトラポッドを洗ふ若潮

春炬燵機械に強き夢を見て

東雲を寿海となせり初酉

うから揃ひて祝ふ屠蘇酒

六角の武者絵の凧を飾るらん

水平線海空分かつ初日の出

船首を飾るお神酒蓬萊

猫走る鶯笛は孫ならん

小野シズ

電線に番ひの鳩や初御空

なせばなるなり鳴りしぼっぺん

晩学の身に鞭打たん物芽出て

小林千雪

加藤治子

高らかに時告ぐ鳥や初御空

はや若水を汲める厨辺

春拾ひと日は優し妻ならん

倉本路子

加藤道子

神鶏の声の朗らや大旦

破魔矢を抱く振袖の胸

旅便りリラの押花こぼれ出て

上月淳子

神谷安子

護摩焚ける最中なりけり初不動

猿曳き囲む輪の中の友

床の間に早梅活けぬ匂やかに

雑賀千鶴子

蒲原志げ子

古九谷の鶏あざやかや初点前

玉砂利を踏み汲みし若水

牡丹雪旅を誘ふ友ありて

坂本孝子

式田和子

袂より紅こぼしつつか歌留多かな

汁粉の椀の揃ふ炊初

こち風にひよこの和毛そよぐらん

杉山壽子

へのへののもへじの顔や初笑ひ

猫も加はる昼の正月

春雷に心気一転進むらん

篠原達子

お迎へ黒子ふえて元気の雑煮餅

初湯長々遊ぶ幼ら

下萌る岬に駿馬駈くるらん

須田智恵

真青に空より降りて初雀

春着の姉妹遊ぶ広縁

蕨餅益子の皿に盛られるて

下坂元子

酉年の絵馬賜りぬ初詣

祝太郎の酔うて候

花ミモザ溢るるばかり投げ入れて

瀧川雅代

初富士や潮溜々と四方の海

松吹く風に淑気満つ里

老師さま毬と仔猫をふところに

下鉢清子

手賀沼の初東雲や羽撃つもの

遠富士青き畦のたびらこ

ファミン子エルジニアの夢育てるて

武村利子

初鶏の一声高き神の杜

恵方道ゆく善女善男

おらが春連句で和々々拵がりて

杉江杉亭

みはるかす山脈凜と今朝の空

海老を飾りし新装の床

鶏合せ手塩の二羽持ち寄りて

橘文子

初風や黄金の耀ひベイ東京

ノッポビルより恵方展望

長春花腕いっぱい抱へ来て



富田 正久

初御空總帆揚げて日本丸

飾りを掠め飛ぶ信天翁

故郷の山河遥けく夢に見て

天地を岩戸開きに初日哉

受けし破魔矢の羽の純白

花の籠コーラスとなる歌ありて

原田 千町

中川 哲

元旦の夕べ客なきまどるかな

狙始きざむ古漬

富士晴るるひと声高き鶏鳴に

醉眼こすり熊穴を出づ

万太郎

キヌ

哲

凡

初晴や比企の杣山幾重にも

ふくさ藁踏み遊ぶにはとり

進級の子ののびやかに唱ひゐて

百武 冬乃

中島 啓世

初凧や湘南の空鷗飛ぶ

船起しすみ祝ふ直会

クロッカス萌ゆるとつ国夢に見て

われ臥すも君辞す勿れ屠蘇年酒

声賑やかに恵方万歳

線となり点となり消ゆ鳥雲に

福井 隆秀

中田 あかり

元日やふるさと清く閑もりぬ

喃語する子に春着ふんはり

桜貝標本箱に三つ置きて

つん読の書もとのへて年初かな

厨にしるき七種の青

百千鳥街にあふるる世の中に

佛 洵 健 悟

成田 玲子

新しき門にかかげる注連飾

実り豊かな万両の紅

阿夫利嶺に今年大雪積るらん

宝船露払ひせむ枕もと

飾り昆布の故国おもひつ

風光る地球局面新たに

峯田 政志

歌垣の筑波の嶺に初明り  
淑氣満ちたる老松の幹  
春の夢白き巨船は岸壁に

村田 富美

ワープする魔女と初猫れんく星  
こぞもことしもころも恋々  
ちらちらと花降る里に君待ちて

矢崎 藍

初明りさし来る二十一世紀  
時をつくれる長き尾の鶏  
父植ゑし梅が見頃とファックスに

山口 瑞枝

吉祥の雲たなびけり蓬萊山  
初声聞こゆ村の老松  
御恵み感謝の美酒を捧ぐらん

吉村 恵美子

霜柱さくさく田中の初日の出  
御形はこべらあちらこちらと  
エネルギークリーン時代夢に見て

若尾 よしえ

歳旦の三つ物は、松永貞徳が承応元年の元日、時の將軍家綱を祝って詠んだのが始まりとされる。而後、これに倣って、正月吉日、宗匠の家に集まって三つ物を作り披露するのを、歳旦開きと言った。

三つ物は、立句・脇・第三で一巻となるのであるから、尋常の歌仙の中から三句を取り出したようなものでは、歳旦三つ物と言われる甲斐がない。たとえば小さな車が小廻りがきくように、たった三句の中に歌仙・百韻のはたらきを持たせなければならぬ。それには、発句・脇・第三の中に、神祇・釈教・恋・地名・人名など、普通の表六句に禁忌となっているものも自由に詠みこむことができ、三句の中にいろいろのもの、ごたつかせないで取りこむことが肝腎である。

具体的には、発句新年、脇新年、第三は雑でも春又は秋でもよいが、春の場合は、春という字はなるべく用いないように注意する。第三に夏・冬を用いることは殆んどない。

連句 猫蓑作品集Ⅰ（一、五〇〇円）

連句 猫蓑作品集Ⅱ（一、七〇〇円）

連句 猫蓑作品集Ⅲ（近日刊行予定）

Ⅰ・Ⅱは残部僅少

（アイウエオ順）

# 「灰汁桶の」の巻鑑賞(Ⅱ)

東 明 雅

新畳敷ならしたる月かげに

ならべて嬉し十のさかづき

野水 去来

(現代語訳) 新しい畳を敷きならべて、月見の小宴を張ると、客膳に十人前の盃を並べるのも嬉しいことである。

(付心・付味) 起情の句。新畳から移徒の祝い事と見て祝宴の風景を付けた。主人の満足感の照応・移り。

(転じ) 打越のわびしい気分から、明るいよろこびの気分転じている。

(補説) さかづきは、この場合、饗応の膳にひとつずつ配る引盃である。酒宴の時、昔は一座に一つかあるいは三つ組の盃などを順々に、序列に応じて廻し、順次飲んで一順させる方式であったが、いつの頃から、「めいめい盃」(引盃)という、客人の膳毎につく小さな塗盃が用いられるようになった。十の盃は親子・兄弟などごく親しい仲に出された十個揃いのもので、十は物のみち足りて欠けぬ意である。

この句を人情自の句であると見ると、打越から三句自の句が続くことになる。前句をはさんで打越は佗しい生活を

描き、この句は楽しい生活を描き、そこに転じが十分あると考えたのであろう。また、強いて言えば、十箇の盃を並べた席には客も当然考えられるから、この句を自他半の句と解することも可能であろうか。

ならべて嬉し十のさかづき

千代経べき物を様々／＼子日して

去来 蕉

(現代語訳) 千年の齡を保つめでたいものをさまざま取り集めて子の日の賀筵を張る。一族が盃をならべて酌みかわすのもうれしいことである。

(付心・付味) 前句の酒宴を正月子の日の宴と見た付。(転じ) 打越と、おめでたい気分は変わっていないが、庶民階級の雰囲気は上流階級の雰囲気転じている。

(補説) 「千代経べき物を」は西行法師「山家集」の歌「ち世ふべき物をさながらあつむとも君がよはひをしらんものかは」を踏まえている。千年の齡を保つめでたいものは、小松や若菜など「子日」の賀筵に用うるもの。「物を」を「物であるのに」の意に取る説もあるが、これでは反意

になって、せつかくのおめでたい気分がこわれおもしろくない。

元々「子日」は王朝時代の貴族の遊びで、新年初の子の日に、野に出て小松を引き、若菜を摘んで千代を祝う行事である。近世になってからは、実際に野に出て小松を引くことはなく、俳諧の季語として、子日草・初子・子の日・子の日の遊・小松引・子日宴などが残った。裕福な風流人が古代の行事に模して、子日宴を張ったものと見るべきだろう。

この句、自の句とも考えられるが、子日宴は独りではなく、多くの一族の存在が考えられるから、これも自他半の句と考えてよいであろう。

千代経べき物を様く子日して

鶯の音にだびら雪降る

(現代語訳) 野辺に出て、子の日の遊びに小松を引いていると、鶯の声が聞こえ、牡丹雪が降って来た。

(付心・付味) 其場の付。「類船集」によれば「子日」と「鶯の声」とは付合語。

(転じ) 打越の人情句から人情なしの句への転じ。打越と前句が古典的でやや重くるしいのに、これは俗にくだけ軽い調子・気分になっている。

(補説) 西行の「山家集」「子日しにかすみたなびく野辺に出て初鶯の声をききつる」、あるいは「古今和歌集」の「君がため春の野に出でてわかなつむ我衣手に雪はふり

蕉

つつ」など、古歌の境地を取り上げながら、「だびら雪」という俗語を活かして、句の格を下けたところがおもしろい。

「だびら雪」は、淡雪・牡丹雪・綿雪・かたびら雪・だんびら雪・泡雪などとも言い、春の雪である。尤も古い季寄せ「増山井」(一六六三)には、十一月の項に「かたびら雪・たひら雪」が記載され、「をだまき」(二六九一)や「俳諧新式」(一六九八)にも同様で、その作例を見ても霞まじるあせま惟た子雪はこもん哉

佐保路なるかたびら雪やならさらし

良徳

など、「かたびら雪」は薄く降り敷いた雪を、夏の帷子になぞらえて言ったものであるのに対して、「たびら雪」の方は

ふるふるをおもひし花はたびら雪

貞徳

声なふて空行鶯や太平雪

政之

など、多く春季に降る水気を含んだ大粒の牡丹雪を指している。「三冊子」には「はびれ雪 かたびれ雪 みな大ひら雪のことをいふとなり」とある。

鶯の音にだびら雪降る

兆

乗出して脰にあまる春の駒

来

(現代語訳) 早春の野辺に遠乗りをすると、鶯が鳴き牡丹雪が降りかかってくる。駒は勇んで乗手の手に余るほどである。

(付心・付味) 起情の付け。前句の明かなくて活動的な気分に対して、勇ましい春の若駒は、よく響き合っている。

(転じ) 王朝公卿風のどちらかと言えば静的な優雅の世界から、動的な近世武士の勇壮な景へと転じ、気分もすっかり変わっている。

(補説) 「乗出して」には、①人間が馬に乗って出る。

②馬が駈け出そうとする。③馬が頭や頸を前に出す。この三通りの解があるが、作者去来の作風から見ても、一番正当な①とするのが穏当であろう。「肱に余る」は手にあまる。もてあます。制御できないの意であるが、その程度が問題である。俗に馬が騎乗者の意に従わないで暴走するのを、「引駈ける」あるいは「引駈けられる」というが、引駈けられたらそれこそ大変で、乗手は驚の音どころではない。その点は、露伴の「肱に余るはただ吾が思ふやうにならぬを、優雅に且又馬上の姿情を具して云へるなり」(「評釈芭蕉七部集」)という説に賛同したい。それ故に、騎乗の人も、手綱をさばく逞しい腕の力溜まで見えるようだと、武刃だて一辺倒では、前句の風情にあわれない。銀鞍白馬の貴公子、紅顔の美少年とまでは言わなくとも、やはり凛々しい若武者と見たいのである。

乗出して肱に余る春の駒

摩耶が高根に雲のかゝれる

(現代語訳) 手にあまる勢いの春の駒を乗り出して行くと、摩耶の山頂に雲がかかっているのが見える。

(付心・付味) 遁句・其場の付け。「三冊子」にこの付合を次のように説明している。

来

前句の「春の駒」と勇みかけたる心の余り、「摩耶が高根」と移りて、「雲のかかれる」とすすみかけて、前句にいひかけて付たる句なり

即ち、前句の勇みかけた気分が付句に移って、さらに「雲のかかれる」と展開したというので、前句の余情と響き合った付けである。

(転じ) 打越の「雪降る」に対して「雲のかゝれる」で、ともに人情なしの天象で、近景・遠景の差はあるものの、気分も転じのない三句がらみの句である。

鶯の音ウたびら雪降ウ

摩耶が高根ウ雲のかゝれるウ

と殆んど同じ句型であるのも気になる。

(補説) 摩耶山は六甲山脈の一つの峯で、高さ約七〇〇米、山上に忉利トウリ天上寺テンジョウジがあり、十一面観音を本尊とし、また仏母摩耶夫人を祀るので、仏母山・摩耶山と言う。二月初午・卯月八日・七夕・春秋の彼岸に参詣者多く、ことに近世期は、初午の日に飼馬をつれて参り、その無事を祈ったことが「滑稽雑談」(一七一三)にも記載されている。摩耶という名が馬屋と通うところから生まれた因縁でもあろうし、この付句の摩耶も、前句の「春の駒」から来ていることは明らかである。

# 馬追

付勝練習二十韻

東明雅

切締句  
4月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中

撫子残る月代の道

秋桜子  
達子

付

治定 秋深し篆書一幅書上げて

よしえ

佳作1小重陽黄瀬戸灰袖手にとりて

達子

同 2 絵画塾巨き南瓜を囲みゐて

健悟

同 3 美術展出品準備もれもなし

美津

同 4 香りよきマロングラッセ取り出して

千雪

同 5 茸飯蜂の子飯も楽しくて

智子

同 6 ヘルシーと菌料理を編み出して

美子

同 7 葡萄酒を醸す家業の友ありて

麻子

同 8 高館の階のきしみも秋ならん

和弥

同 9 受賞後を添水真近な茶室にて

鋭太郎

10 口切や沸々たぎる湯の音に

11 アップルのパイは銀器に饗されて

12 行水の名残も昨日今日にして

13 夜学子の帰りに来る頃ならん

14 築守りの落鮎を焼く頃ならん

15 御自慢の厚物味の宿ならん

16 夜なべする仲間次第に減りて来て

※ この大山・杉形・小山の三法は、いずれも第三を丈高

くする為の二章体である。

さて、発句・脇句は戸外の景、人情なしの句である。だから、これに変化をもたせ、転じをはかるには、室内の景、そして人情の句がよい。

治定の句および佳作1・2・3はその条件を満たしている上に、丈高く、百句の中においても、第三の句だとはつきり分るものである。この四句がそれぞれ、篆書・黄瀬戸灰袖・絵画塾・美術展と、いずれも美術関係の句であることも、丈高くするに効果があったと思われる。そして1・2はともに大山体の二章体で、早速1を採用しようと思っただが、これは既に脇の句を取った一巡の人なので、同じ人を続けるわけに行かず残念であった。2は発句と違って近代性があり、明るくてもおもしろいと思っただが、「巨き南瓜」がやや第三にしてはくだけすぎかと思われる。3は厳密には二章体の句とは言えないだろう。二章体でなければ絶対に悪いと言っているわけではないけれども、中七・下五はもっと別のことを言っていて欲しかった。それで治定の句は、原句は「秋興の篆書一幅書上げて」であった。これも二章体ではなかったが、ちょっと一直すれば二章体になり得る。それで上五を勝手に変えさせていたのだ。これはあまりよいことではないけれども、他に適当な句が見当らなかつた為の窮余の策である。捌きに免じて承して欲しい。

佳作の4以下9までは、丈高いことにおいては治定の句、または佳作の1・3には劣るけれども、第三としての条件

- 17 泥染めの秋袷着てしとやかに  
 18 牧閉ちて家族一同爽かに  
 19 からからと鳴子の音もさびしくて  
 20 かへりみるハッ連峯は爽籟に  
 21 秋遍路後姿の姉に似て  
 22 教会の帰り二科展に立ちよりと

第三を付ける時、注意しなければならないことを列挙すると、

- ① 第三は発句・脇の境地から一転すること。  
 ② 第三は丈高く、品位のある句が望ましい。  
 ③ 発句が春・秋ならば第三も春・秋、発句が夏・冬の場合、第三は雑になる。(尤も歌仙の場合は第三も夏・冬とする方が多い)  
 ④ 留めは、に留め・て留め・にて留め・らん留め・もなし留めなどが普通である。  
 ⑤ さらに、もう一つ、第三には独得の第三体というものがある。

大山

秋の風鍛冶の研の通ひ来て

杉形

むら雀日和定むる声立てて

小山

みの作りみの作りさす雨止みて

※

にはずれていないので一応合格としたのである。これらもたとえば4「旅袍マロングラッセ取り出して」、5「茸飯新築の家楽しくて」、6「異邦人菌料理を編み出して」などにすれば、原作よりもおもしろくなるだろうし、7も「葡萄酒を醸す家業の友訪ひて」、8「掛り人階のきしみも秋ならん」、9「賞受くる添水に近き茶室にて」などに直せば、第三として使えるのではなからうか。

10の口切は初冬の季語であり、また、「や」というような切字は発句以外に濫用すべきではない。11この句は「アップルのパイは／銀器に饗されて」と、中七の真中で句切れになっている。第三はこのような句切れを嫌うのである。12この句も「行水の名残も／昨日今日にして」と胴切れである。13発句・脇ともに夕方から夜の気分が滞っているから、夜学など出せば気分が転じない。14鮎は発句の馬追と異生類の打越である。15厚物咲と言えば菊の花であらう。前句の撫子にスリツケであるから、普通なら許されるだろうが、表四句で名ある秋草を二つ、しかも続けて出すのは嫌う。16これも夜の気分が続く。17これは何かすてきな女性を連想させ、恋句めいている。18牧は田舎にあり、発句・脇と三句がらみになる可能性がある。19ここで音を出す・発句の馬追にさわるだろうし、特に鳴子は馬追鳴けると同字である。20これも発句のふるさとと気分が通い、三句がらみである。21遍路は釈教の句であらう。22教会も宗教に関係あるから駄目。

四句目は無季で人情の軽い句を出して下さい。

## 第7回 国民文化祭石川92連句大会

### 連句大会津幡とところどころ

下鉢 清子

宗祇が八賀やまぐちを加る国の白き山Vと詠んだのは加賀の国のシンボルの白山であるが、その加賀の国は北陸の中心地、東は越中、北は能登、西は越前、南は飛騨と接する地である。元禄二年「おくのほそ道」の旅で加賀路に入った芭蕉は、金沢で弟子北枝と語り一笑の死を悼み、山中温泉で旅の疲れを癒しなどし、「山中三吟」を成すなどの多くの足跡を残しているが、加賀は京都や江戸とはまた異った絢爛たる文化の育ったところ、風雅の土が多く、また近代には多くの文学者を生み、独特の文化的風土の地である。

こうした歴史を持つ地で、平成四年十月二十四日から十一日間にわたって第7回国民文化祭・石川92が開催された。その中で連句行事の日程は二十八・九日の二日間、連句大会会場は加賀・能登・越中の分岐点に位置する津幡町で、人口二万七千人の三分の一は農業人という静かで美しい田園都市であった。大会前日の二十八日の史蹟巡りには七十名、続く前夜祭は百八十名、二十九日の連句大会当日には二百十余名という多数の連衆の参加があり、連句人の交流と半歌仙実作にと励みつつ、連句大会のテーマ「やまと言葉の奥義を探る」ことに貢献し合ったのである。

私の津幡町行脚は大会前日の史蹟巡り俱利伽羅不動尊か

ら始った。とは書きながらも数日前にお聞きした明雅先生の、二十九日当日の立句八俱利伽羅や狭霧が襲ふ谿紅葉Vが見たしと、不動尊は通り抜け只管裏山へと急ぐ。余りの脱線振りの数名のために、津幡町の職員が先導して峠までご案内下さったが、お陰で火牛作戦の谿を遠望し、翁の句碑八義仲のねざめの山か月かなしVに対面し満足をしたひと時であった。「血相変えて何処へ行ったのかと思った。」と話題になった一齣であるが、その後は羽咋市の気多神社を経て、千里浜の風光を楽しみなどし、前夜祭の会場で上大田獅子舞、津幡民謡会の石川民謡づくしに酔ったのである。二十九日の連句大会々場は津幡町福祉センター。十時よりの開会式につづく表彰式には、第7回国民文化祭実行委員会会長賞に倉本路子捌「遣唐船」の巻、同石川県実行委員会会長賞に八角澄子捌「引鶴や」の巻、同津幡町実行委員会会長賞に百武冬乃捌「名草の芽」の巻が授賞し、その他多くの猫藁会作品が秀逸や佳作に選ばれたことは嬉しかった。今もくつきりと、千里ヶ浜の落日の美しさ、マスコット「文化ちゃん」の短冊片手のお河童姿の愛らしさが目に残る。前年の千葉の係の一員として、連句の会を盛大に引き継いで下さった津幡の方々有難うと言うのみである。



遣唐船

倉本路子 捌・文

遣唐船往きし潮路やつちぐもり

肩をかすめてひらと燕

摘草の母子とき折見交して

玻璃戸に立てる影の誰やら

CDのシャンソン聞きつ仰ぐ月

新酒利酒いささかの酔

江鮭<sup>つゝめ</sup>天津祭の御馳走に

そりあと青き男笑ひぬ

心中の傷をかくせる腕時計

寝返る度に憎さこみあげ

川涼みのつべらぼうも連れのうち

ぼつりぼつりと裸電球

冴ゆる月シベリア鉄道果しなく

咳こぼしつつ老の手仕事

「夢」といふ色紙もらひて掛ける壁

若貴人氣一瞬に消え

山峡に知られぬ花の咲き乱れ

ふんわり結ぶ春のスカート

平成四年三月二十五日

於 朝日カルチャーセンター

思いがけぬ喜び

津幡から「貴殿が捌かれた作品が入賞いたしましたので……」との知らせを戴いた時は、青天の霹靂とはこの事かとばかり驚きました。而も実行委員会長（三浦朱門）賞とのこと、この齢になって思いも寄らぬ光栄なことで大層嬉しゅうございました。

この作品は朝日カルチャー教室で、初めて捌かせて頂いた時のものです。発句は、遣唐船の最後の寄港地、福江島で「あの島の間を過ぎるとあとは渺渺たる大海原……」と聞いた折の感動を詠みました。ベテランの連衆方が出される転じの効いた句に、迷ってうろろしていると、秋元先生に「捌は席に落着いて」と注意され恐縮したことなど想い出されます。受賞のことを連衆（大先輩）へ電話報告、「エッ本当ですか、僕（の）の字一字でも嬉しいです」と政志さん、さすが俳諧師ノと脱帽。未熟な捌を扶けて下さった皆様、まことに有難うございました。

又「作品集」の中では、春山洞先生に大変お褒めを頂き、感激を一層深く致しました。然し一番喜んで下さったのは、明雅先生と正江先生です（一番びっくりなさったのもお二方では……）、両先生には「お陰様で」と百万遍も御礼を申し上げたい気持ちでございます。

表彰式に参加した二日間は夢の様でした。お世話くださった津幡や金沢の方々の御親切、あの暖さも一生忘れられないと思います。本当に有難うございました。

路子 千町 杉亭 政志 町 亭 町 町 亭 志 町 町 亭 志 町 町 亭 志

引鶴や

八角澄子捌・文

能登はやさしや

引鶴や急がぬ旅を七尾まで

鞆にそっとひそむ春愁

焙師の揉みし茶の香の立つならん

隣部屋よりミシン踏む音

そぞろ寒月皓々と照らしぬて

遊び散らせしままのべい独楽

秋味の湖上を見んと橋の上

ヴィオラのケース提げて足ばや

神父様おひげ丸帽笑みこぼれ

馬刺猪鍋純米の酒

農村の嫁のひでりをかこち合ふ

色浅黒く甘き体臭

ヨットの帆傾き隠すキスシーン

淡くかそけし夏富士の月

忘れじと思ひつ忘るけさのこと

ワープロで打つ般若心経

西行の庵に降りつぐ花吹雪

峽をななめにすがる飛びゆく

平成四年四月六日

於 新宿滝沢

澄子

利子

元子

雅代

一恵

利

利

元

同

恵

代

恵

同

代

澄

代

利

元

引鶴や急がぬ旅を七尾まで

旅をあこがれる人間のひとりとして、旅の中でも「急がぬ旅」こそ旅の中の旅、理想の旅と思っている。勿論あの歌枕、この旧跡と日本はおるか世界中可能な限り見てみたいとの想いも持っているが高望みしても仕方がない。やはり好きな土地を一人か、限りなくひとりに近い二人でふらりと参りたい。

十数年前、「能登はやさしや土までも」とあった記事に触発されて奥能登一周旅行を思い立ち、金沢一泊の後七尾線に乗った。この旅は文字通り理想に近いのんびりした一人旅だった。二月末の某日、雪景色を想像して行ったのに、その年は暖冬で線路沿いにはペンペン草と菜の花が咲いていた。奥能登観光バスで輪島へ、そしてもう一度山あいを通る路線バスで宇出津へ戻った。

昨年、国民文化祭に出品する半歌仙を巻くことになって開催地の津幡町を地図で調べてみた。何とあの大好きな七尾線上にあるではないか。

この思ひ出の七尾線の旅が発句になり、後は連衆の皆さんが、ああでもない、こうでもないとお智恵を絞って下さって思いがけなく受賞の栄に浴したわけである。

わが友と石川県には足を向けて寝るわけにはいかない。

# 名草の芽

百武冬乃 捌・文

おのづから香にはほひけり名草の芽

北窓開く里の家々

白酒に児らの歌声果もなし

手篋の中の刺繡取り出す

高原を友と騎りゆく宵の月

プラスチックの案山子くるくる

ハローウィン猫の尾を踏みとび上り

あのおてんばが美女に変身

桐箆守り刀を秘めて嫁く

義姉がまぶしい義弟十七

スフィンクス熱砂の町をF1で

織月浮かぶスコールのあと

奇しき事多き伝説読み継ぎぬ

鯛焼買って戻りくる父

医療費の控除に入歯役に立ち

夢といふ字をゆっくりと書く

航跡の曲る岬の花盛り

へたな鶯またも裏山

平成四年三月十一日

於 新宿

## 助け舟をたよりに

連衆御一同を前に捌の席に就いた折の心持は未だに表現できません。この錚々たる面々を率いて十八句の詩の海を漕ぎ渡れるものやら。不安の波に溺れてしまいう。でもこの方々なら、必ずや助け舟をお出し下さる筈。他力本願に縋ってともかく姿勢を正します。

まず連衆への敬意をこめて発句を。すぐに幸先よく窓が開かれ、可愛い歌声に励まされて手仕事を楽しむゆとりも出ました。付味に迷えばベテランならではの御助言に救われ、現代らしい軽さのうちに恋へ。美女に変身した姪を持つ捌が、ふと閃めく想を得て継がせていただきました。向付での屈折した恋情、ころり転じてF1に。こうして鯛焼へと続く運びは連句の面白さの一典型と申せましょうか。

更に俳味ある病体も出て、捌も思わず知らず悠然たる人物を描くことができました。視界ひらけた岬の花、耳には微笑ましい鶯。

連衆の力量なしにこうした変幻ある詩情の展開は望めません。助け舟を乗り継いで、ゴールに辿りついた捌は、連衆御一同にただ熱き感謝を捧げるばかりでございます。

このたび思いがけなくも、第7回国民文化祭にて、この巻に「津幡町実行委員会会長賞」を賜りました。一卷を流れる詩情とそれを支える連衆の詩魂がこうした形で讃えられたことは、誠に嬉しく有難く思われます。捌はその大筋を決めるお役目を何とか果たしたと云うに過ぎません。

谿紅葉

東明雅捌

俱利伽羅や狹霧が襲ふ谿紅葉

径七曲りのぞく昼月

江鮭色つややかに炊きしめて

急に激しく猫を追ふ声

箔を打つ音にひかれて入る店

夏の暖簾に家の紋染め

オープンカー横付けしたる同級生

どちらにしよう恋のかけもち

細腰を抱けば撓ふ統の肌

鱒酒を酌む洛北の旅

雪吊りの真上に月の昇りけり

父に戻りし宇宙飛行士

我儘に育てて夢を托しをり

電子ピアノで流す讚美歌

調剤を間違へ渡す老先生

蝶はひらひら人は浮き浮き

海が見えお城が見えて花筵

サイクリングは春風を切り

東明雅

高村俊子

瀧川雅代

山崎一恵

西川柳史

田中英子

代

史

恵

俊

英

代

史

恵

俊

英

史

田村ゆう子

山彩る

秋元正江捌

山彩る俱利伽羅峠越ゆるかな

棹くつきりと渡るかりがね

童話集読みやる窓辺月ありて

教壇に立つ準備完了

どこまでも生き甲斐求め励みけり加藤湖月

ざっくり編みし毛糸ジャケット豊田好敏

港町除夜の汽笛を鳴らす船

高砂を舞ふ宝生の能

缶詰に飽きたる猫をもてあまし

エレベーターで握る左手

後家さんに心もとろけ身もとろけ

吉祥天女のうしろ梅雨寒

苔清水月のコインの泛かぶらん

定期検診まづは合格

九十九折登りし果ての千枚田

初の諸子で地酒酌み合ふ

老幹に憩ふ花あり城下町

絵巻に箔の霞ただよふ

秋元正江

下鉢清子

原田千町

小山西置

豊田好敏

町

置

子

敏

置

子

敏

町

月

子

置

月

月

新走り

内田麻子捌

新走り一会の友と酌む夜かな

汀を遠く照らす月影

あにおとと競ひあきつを追ひかけて

同じところでソナタ間違ふ

三世代住むビル空へ伸びて行き奥村富久女

特急すぎてあぢさゐの揺れ

妄執を包むに薄き夏衣

噂ひそひそ嘘かまことか

若武者のりえちゃん寄り切る恋土俵

ハイテクカメラあら動かない

剥落の観音拝む羽賀の寺

尊厳死証秘めて又冬

顔見世の招き看板宵の月

下駄にまつはる青い目の猫

板前は客前にして魚さばき

放歌高吟春泥を踏む

佐保姫の深山の花に遊ぶらん

種時く人の動き出す頃

内田麻子

佛淵健悟

紙谷湖秋

上月淳子

久保田夜虹

女

淳

秋

悟

麻

女

虹

秋

淳

虹

女

悟

菊日和

式田和子捌

時雨るる加賀

中川哲捌

早稲の香

福井隆秀捌

加賀染の拾や今日の菊日和

式田和子

ひとり来て時雨るる加賀の都かな

早稲の香や芭蕉分け入る加賀の国

雁渡し吹く空に昼月

中島啓世

枝美しく張りし雪吊

舟橋玉枝

背に負ひたる笠に蜻蛉

落鰻あつあつのまま運ばれて

金子容士

母と子でピアノ連弾競ふらん

武村利子

月賞づるマロングラス卓上に

連吟終へて謡本閉つ

島木悦子

犬にもおやつ用意する卓

峯田政志

積木の城を積みあぐる子等

留守録は笑ひこらへて聞くが常

若松隆一

月出でて散居の村の明らか

朝倉一夫

石畳細き小路のややくし

雨にはだしの児等が喜ぶ

津幡敬子

背戸のあたりに虫の鳴き初む

水野道代

あるかなきかに鳴れる風鈴

竹人形鬼女が迫り来夏座敷

悦

義仲の菊人形と睨み合ひ

志

サングラス橋のほとりにバイク止め

遠き笛の音川の辺り宿

敬

單車相乗り飛ばす崖ぶち

子

身をよぢらせて言ひ訳をする

猿軍団レパートリーがひとつ増え

士

懐に忍ばれてゐる恋の文

哲

涙溜めじつと眼を見る酔ひの果て

青髭男剃り跡に傷

世

「りえ」のハートも射止め優勝

枝

甕に塩漬けたる株券

溶けさうなをんなを抱いて夢うつつ

一

平和への期待伝へる両陛下

代

利剣拳ぐ俱利伽羅不動凍てし月

宇宙遊泳シャガールははや

世

遺愛の緋鯉育つ大池

志

「熊に注意」と立札のあり

さりげなき石のくばりに冬の月

士

貝塚の跡に上がりし月涼し

子

人の世に焚き続けたる登り窯

爛酒しづかにのむべかりけり

世

おはじき遊び赤青黄色

夫

ぎっくり腰がとんと直らず

父祖の地に連句巻かんと集りぬ

敬

痛む足いたはりつつも試歩伸ばす

代

楽屋までアプロポップス響きゐて

かはすも吾も穴を出る頃

一

大山門に東風の吹きゐて

夫

ひらひらと振る春のスカーフ

ひとひらの花びらかかる僧の袖

悦

花びらを浮べて廻す茶碗酒

枝

学び舎へぐり抜けたる花の門

小手をかざせる巡礼の列

士

遙けき空の揚雲雀聞く

子

山も笑ひて霞たなびく

余

秋麗

本屋良子 捌

秋麗やまと言葉の似合ふ町  
 百万石の苑の紅葉  
 月の主連衆の面を照らすらむ  
 孫を相手に絵本ひろげる  
 夏服のタイの水玉五六粒  
 頬ふくらませビードロを吹く  
 街道の潮錆びの松響き合ひ  
 塗の文箱に秘めし恋文  
 ドル高に油太りの御曹子  
 カイゼル髭のアラビア商人  
 風紋を崩す砂丘に船つけて  
 朽木に凭らば地酒呷らむ  
 はからずも友の墓標に冬の月  
 鴨の一羽が水輪離るる  
 宗五郎渡しの爺に助けられ  
 事こまやかに日記綴れり  
 花嫁の花簪に花吹雪  
 和敬清寂黄蝶の翔ぶ

本屋良子  
 中野泰子  
 伊藤哲子  
 森木石哲  
 山崎春子  
 須原正子  
 泰哲  
 良哲  
 泰哲  
 石哲  
 正哲  
 良哲  
 春石

☆新刊紹介☆

連句恋々 矢崎 藍著

俳諧(連句)は江戸時代、庶民の間にひろく愛好され、流行していた。明治以来、文明開化の影響によって潰滅したと思われていたが、近時また復活の傾向を示している。連句がなぜ復活したのか、あるいは復活しなければならぬか。連句というものの本質にふれて、その魅力を自分の体験にかさねて、興味深く綴ったのがこの本である。

著者はお茶の水女子大学国文学科出身の才腕、目下、豊田市を中心に新聞に雑誌に大活躍している人であるだけに、軽妙な文章のおもしろさ、作品の新鮮さは、忽ち読者をひきつけるであろう。俳諧(連句)を今まで知らなかった人に対しては、新しい文芸の紹介であり、今まで俳諧(連句)をいささかなりと楽しんで来た人にと取っては好箇の手引書である。

筑摩書房 刊  
 定価 一六〇〇円

連句入門

講師 明雅 東元 秋元 明正 江和 信州大学名誉教授 俳人協会会員

●講座のねらい●

この講座は、芭蕉以来の伝統を守りながら、芭蕉の詩情を現代に活かした作品をめざします。講座の進め方は、連句の構成、法則などについては、テキストによって解説し、連句を理論的に把握していただくと同時に、クラスの中に「座」をつくり、実作の体験を出来るだけ重ね、連句の楽しみとこつとを会得していただくつもりです。

今回より新しい講師を加え、魅力ある講義を企画しております。

期 間 1993年4月～1993年9月 全10回 第2・4土曜日 10:00～12:00  
 場 所 新宿住友ビル48階 朝日カルチャーセンター(受付は4階)

白桔梗

松本 碧 捌

糸瓜

佐古英子 捌

石路の花

山口美恵 捌

一軸は大道無門白桔梗

明雅

ぶら下る外に能なき糸瓜かな

明雅

石路の花日和といふも二三日

明雅

秋の扇のまだほしき部屋

好敏

雲居に透くる肌寒の月

英子

じはりじはりど地より寒露

好敏

満月に向かひ旅立つ人ありて

秀樹

鱧子とバカラの杯でもてなして

碧

公園にアングラ劇の幕明けて

秀樹

遊泳授業子等がよろこぶ

英子

CM見てははしゃぐ幼児

好敏

みたらし団子お土産にする

英子

古楽器の音もささえユリシーズ

碧

不況風くるま家電に銀行に

秀樹

高山は名酒名月陣屋跡

美恵

言ひ寄る男ちぎつては投げ

敏

蟻地獄にも似たるわが恋

雅

ウエディングドレス蘭の一束

英

見るからに清楚清純幼な顔

樹

その時は羽化登仙の心持ち

樹

西鶴忌世之助よりも恋上手

同

阿修羅の像に哀愁の翳

雅

靈験多き熊野権現

碧

勝つても負けても俺は虎狂

敏

「ペペル・モコ」「外人部隊」「巴里祭」

英

初老なる火の番小屋の股火鉢

敏

大病で借金地獄助からぬ

樹

ちぬの刺身であふる冷酒

敏

鷹を放つてまづは一服

樹

古道具屋に並ぶ藤椅子

敏

飛脚便困ったものを配達し

雅

NY線ビジネスクラスときめてゐる

碧

トンカツにキャベツたっぷり盛った皿

樹

カラシニコフが組に出る

樹

ちよつと気障なるここのソムリエ

雅

LSサイズ下着手洗ひ

英

色丹の熊穴に入る月明り

英

死の床ではじめて明かす芸者の名

英

英国の城を巡つてふたり旅

樹

あらぬ姿で誘ふ雪女郎

雅

よき夢くれた君が最高

敏

不倫の噂消えかぬるひと

雅

バスト百ヒップ小錦クラスにて

碧

アカシアの大連港に昇る月

樹

雪女口紅つけて覗く月

同

三十三キロ生きる限界

英

中国料理またも出る豚

雅

映画のロケも目下順調

敏

山駆ける高地民族今の世も

樹

北杜夫遠藤周作阿川さん

碧

海の果神を夢みて老いはてぬ

恵

軍鶏をたたいて井の春

敏

人の躁鬱山笑ふなり

雅

鐘の供養に集ふ子供ら

雅

満開の花を求めて廻り道

碧

花の下安良居祭練り歩く

敏

花篝だらりの帯のつややかに

恵

ふらここゆする若き日の夢

英

笠をかむった浜焼の鯛

英

鳥獣虫魚よろこびの春

雅

平成四年九月十七日

平成四年十月十五日

平成四年十一月十九日

於 電通南寮

於 電通南寮

於 電通南寮

## 芦丈翁俳諧聞書(Ⅶ)

H先生実はアノさっき言ったように、芭蕉の書簡集を読んでおりますとね、付方十七法ですか。そういう言葉が一ヶ所出て来ます。その外にまあ、俳諧というものは、どういふものがいいんだというようなことを書いたところもありますが、N何という人と本かね。Hエ、これは勝峯さん(晋風)の「芭蕉書簡集」ですが、Nウーン、H外にも芭蕉の書簡を集めた本はあるようですが、N勝峯氏はまあ割にいい方だけれども、アノ学者の人たちがね、ま、どうも、それは間違つた感違ひしたようなことをやっているからしてね。それで勝峯氏は二十四句の連句をこしらえて新連句だと言ってね、それからして、旧連句の方で、普通の連句の方でさらう事をしてね。それを言うつとね。いや、それは旧連句では嫌うが、新連句ではいいと、一向かまわなないというような事という。それでわし、これを馬鹿にしてね、それは丁度、講釈師の種本だと、講釈師の種本というのが、荒木又右衛門の伊賀の上

野の三十六番斬りというようなのを、今晚はやりませんが、伊賀の上野の旧家の土蔵から、写本が出てきたのをずっと読んでみましたが、それは大筋は同じであるが、所々違ふところがありますから、今晚それによつてやりますと言や、いいかげん出たらめやつてもかまわねえだ。そこが違ふところだて、Hここにありますが、北枝あて、加賀の北枝あてに附合十七体、十七条ですか、その文章を読んでみますと、「附合十七体別紙に記進候。初心には見せ申されまじく候。術のかなはぬ内に此味をつけんといたし、却而一句もとのはず、付意もしれぬ事に成もの候、又むつかしきもの也：」(この手紙は偽作であることが現在では定説である——東註)、とまあ、こういう文章なんですけどね、「N「その通りだ」H「でこの宛名が北枝になっておりますから先生がこの間、お示し下さつた北枝の方方自他伝というものも、おそらくこの辺から出たことだと思ひますが」、N「そうだな。そういうものからね、三年の工夫をしてというわけだね。ところがね、あの付方自他伝はまあ一応の基準であつて、それでは今度は千変万化になって来るだ、Hハア、

N何でもあれから言えば、三句ならんではないものは何にもない。自でも他でも人情なしの句でも、ところが、芭蕉の連句になつてくると、それが自が三句ならんじやいけないというのでも、それは何だつたら、変化しないからいけないというのであつて、変化していればいいという。Hウーン、Nそりや、どういふ風に変化するといへば、まあ、あの巻でいうと、「さし木つきたる月の朧夜」・「苔ながら花に並ぶる手水鉢」・Hああ、「猿蓑」の「鶯の羽も」の巻です、Nそうだが、「猿蓑」にあるだ。「苔ながら花に並ぶる手水鉢、これは自でしょう。「ひとり直りし今朝の腹だち、自でしょう。「いちどきに二日の物も喰て置」自でしよう。それから「雪げにさむき嶋の北風」H「ああ、ここにありますがね、エ、「苔ながら花に並ぶる手水鉢、これは芭蕉の句自です、自です、自です。N「ウーン、前の並ぶるは、次の付けによつて自にも他にもなる。その腹立ちがなるといふのは、鉢をならべたりしているうちに自然と直るといふのだから、これは自です。Nなるほど、Nそれからして、その次にいつてね、「いち



どきに二日の物も喰て置」Hこれは凡兆です  
ね、Nこれが自です。それからしてね  
「雪げにさむき嶋の北風」H史邦です。ね  
Nそれが寒いというから自の句でしよう。

H自ですか。N「火ともしに暮れば登る峯  
の寺」これも自でしょう。Hハア、N「ほ  
と、ぎす皆鳴仕舞たり」これは人情なしで  
そで、ここところ五句ばかり自の句が並  
んでいる。これでなぜいいかと言え、見  
事によく進展しててです。このように見  
事に転じて進んでいけばそれでいいと、芭  
蕉の心法というのはこのことです。心の  
法というね。そうだと、わし、何あの九州  
のね俳文学会の時（昭和三十七年於太宰府  
俳文学会総会——東註）、心法をまあ何だ、

「あはれさの謎にもとけし郭公」・「秋水  
一斗もりつくす夜ぞ」（「冬の日」・「狂句  
こがらしの」の巻）のね、あそこを話して  
そしてその次に心法について話しはじめた  
ら、時間だというもんでやめたけど。そ  
ういうふうなところが、片っ端から芭蕉の  
連句を読んで行ってみりゃいくらでもある  
です。Hウーン、しかし何でしょうね。  
自とか他とかいう問題は、連句を今作っ  
ている人たちは、そんな問題を取り上げます

けれど、学者、たとえば宮本三郎先生など  
はどう考えておられるでしょうね。N「宮  
本三郎さんがね。わしがやったあと、「芭  
蕉の連句の一手法」というのを発表してね  
それからまあ、その質問時間がまあ五分あ  
る、それから、わしね、「足袋ふみよごす  
黒ぼこの道」・「追たて、早き御馬の刀持」  
・「でっちが荷ふ水こぼしたり」というの  
をね、Hあれも「猿蓑」の「市中は」の巻  
でした。N「あれをわしね、芭蕉のいく  
ら捌きでも、ありや、わしやどうも気に入  
らないと、「追たて、早き御馬の刀持」御  
定免の馬でね、ハイヨウハイヨウと言って  
煙たつてとんで来ると、刀持を後にひかえ  
てと、それからして「足袋ふみよごす黒ぼ  
この道」、この道は馬をよけたことになる  
だ。そして、その打越にもつていって、

「でっちが荷ふ水こぼしたり」と、一方は  
担った水をこぼす、一方は足袋をふみよご  
すと、風車の廻るような、H輪廻になりま  
すね。Nそういうものはわし気に入らねえ  
といった所が、宮本さんはね、それは足袋  
ふみよごすのは刀持の足袋だということから  
して、刀持の足袋なんてものは、初めからし  
て足袋はだして、汚れるなあたりめえで、

それじゃいけねえとそれから、ま、二三押  
問答、それも五分きりだもんで、それで両  
方で手前の言いたいことを言っただけだ  
ってだけ。宮本さんあたりだつてその程  
度です。Hじゃ、要するに自と他とが分  
からないというわけですね、N自と他が分  
らねえじゃねえ、その運びだね、運びを、  
その本当の運びが分らねえだ、Hうーん、  
Nそれで、わしどうもね、何か見たり聞  
いたりするのがたまらないです。芭蕉の  
真髓を伝えるものがね、H八方自他伝は、  
Nそれは一応のお手本だ。それはそれ  
きりに泥んでる人がある。中にはね、そ  
いつを一つもはずれば全然いけないとい  
ってる人があるけど、それじゃまるで琴柱  
に膠になつてしまふだ、Hうん、Nそれで

ね、まあ、つけはこびのそういうところを、  
どうしてもさつてもらわなけりゃいけ  
ない。やはりあの、「狂句こがらしの」の  
巻だけでも、「日のちりちりに野に米を蒔」  
と、これは折端だ、これは後の付けによつ  
て自とも他ともなる。それからその次だ  
がね、「わがいほは鷲にやどかすあたりにて」  
そうするとね、わがいほはという人が稲を  
刈るといふじゃいけねえだ。（次号へ続く）

百韻

霜月や

坂本孝子捌

初折

霜月や地に吸はれゆく雨の音

雪吊濟みし老松の枝

片襷なめらかに削ぐならん

新刊の名をメモにしてをき

ばきばきとシャープペンシル折れやすく

少年野球急ぐ自転車

山の端のはやも明るし良夜にて

葡萄酒醸す石組の蔵

秋薔薇残る一枝を惜しみ剪る

サリ一の佳人真顔に紅

豊饒の腰くねらせて誘ふ神

小型旅券も恋の小道具

都庁舎の維持費庶民を驚かし

占ひの灯の増えし街角

サイダーの泡ごしに見る月歪み

こもごも語る河童忌のこと

落書を消せばまた書く餓鬼集団

土曜休みで行事びっしり

孝子

みづゑ

瑞枝

千町

遊

淳子

好敏

町

淳

町

遊

敏

枝

遊

町

敏

遊

枝

自炊にはカレーライスが得意です

轆轤ひきをり過疎村に棲み

北上に水鏡して花ひそか

車の窓に当る姫蛇

二の折

復活祭アレルヤの声堂に満ち

風船売りのピエロ近付く

鳩の餌横から雀ついばんで

撫でて頼みし猫の留守番

どうしたのあなた下着が裏返し

五十過ぎたる愛は水色

数へ日の亭主関白忽と逝く

伊吹風にテレビゴースト

スケッチの時々ふくむポケット瓶

しばらく軒を借りる鑄掛屋

無住寺に入りたる僧は異国人

水を掬へば月は手に在り

ちぢる虫さす目薬のひいやりと

金柑甘く母の煮詰める

鮮やかに白線が延び運動会

値引き合戦カメラ新型

生まじめが取り得困塊世代なる

隙間隙間にもぐり込む彼

妬心持つ魔女の食事はペラドンナ

いばいば濡らす裏の粘液

総裁はにやりになりとするばかり

大向ふからかかる高麗!

この辺り日劇ありき月冴ゆる

就職情報本腰で読み

ふところの淋しき時は友を避け

吸ひさし煙草投げる船乗

どよめきに仕掛け花火の瀧となり

汗疹の吾子の抱き重りする

三の折

会釈して追ひ越して行く登山帽

本屋の薄き抽出しに地図

スタンドは浮世絵写しガレの玻璃

熟れた乳房を弾ませて脱ぎ

敏

淳

敏

遊

町

枝

敏

遊

敏

町

敏

町

淳

孝

孝

町

枝

敏

孝

あらけなし男の息の轡めき

末は墓場に埋めん秘事

桂冠の荆となれることもあり

難民キャンプ毛布配らる

トランプのちよつと意地悪ならべ

皺と脂肪が老いのはじまり

ふつくらと微笑仄かに麻布菩薩

吸はるるやうに消ゆる現金

ノクターン調べは月に響かせて

指をな触れそ屁ひり亀虫

脇本陣あるじ狂ひしななかまど

カオスの中に見ゆる将来

ダイキリのカクテルグラス涼しげに

不倫せめ合ふ皇子と妃殿下

兄よりも女に早き次男坊

楽しみにする明日のドラフト

銭湯の前のさよなら月朧

春の蠅打つ婆の新聞

巢離れの鮎いっせいに向きをかへ

昔話にソビエトといふ

脱サラの電気治療師大流行り

晩三吉の齒にしみるこゝろ

餅花のよこ座かか座にみな和み

凶鑑の中の鳥のいろいろ

遊 名残の折

枝 つなぎ着て歩くロフトのそぞろ寒

町 密輸拳銃覗かせる月

淳 悪霊の棲むか長夜の杉の森

同 体験座禅壁に並びつ

遊 躁鬱で過食拒食が激しかり

孝 全部帆あげしやうにめかして

町 芸者衆ぞろり従へオペラ観に

淳 自慢聞くのもやはり老妻

町 雪片の追ひかけて来て積る原

同 頭ばっさり落とす新巻

同 放課後に床屋へ行けと金渡す

遊 長電話する扉閉め切り

同 深海をノーチラスにて探す夢

孝 騒ぐマグマの前兆に触れ

淳 夕映の東西かけて杜鵑

支 聖書置かれし固き木の椅子

支 ちよつと片目つぶってこの世おさらばし

敏 せかずあわてずあきらめずして

淳 酒屋から転換大型小売店

支 おまはりさんの軽い敬礼

敏 跑足を踏ませてくぐる花の下

町 寝覚め清しく笑う遠山

平成四年十一月二十日

於 三鷹 小林宅

支

町 山口 みづゑ

敏 大窪 瑞枝

遊 原田 千町

支 雑賀 遊

支 上月 淳子

支 豊田 好敏

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

支

「季刊連句」に左の方々より、御芳志を  
いただきました。有難くお礼申し上げます。

- 一金 一万円 四宮 会様
- 一金 一万円 風蘭 社様
- 一金 三万円 柏連句 会様
- 一金 二万円 綾の 会様
- 一金 三万円 鶉籠 会様
- 一金 一万円 ころも連句 会様
- 一金 十五万円 猫蓑 会様

歌仙 冬ぬくし

杉 江 杉 亭 捌

加越能岐るる峠冬ぬくし

紅葉散り初むせせらぎの橋

飽研ぎ千枚漬を作るらん

茶受けの座にも長幼のあり

発表会終へて出づれば月まろく

帰るつばくら並ぶ電線

杉板にはさむ鱸の幽庵蒸

強くなつたと寝められる酒

介抱の仕方上手につひほろり

身八つ口からちらと柔肌

鳴り響く目ざまし時計ぱつと止め

御来迎待つ山小屋に月

マイセンの皿にはゆるるババロアを

勲章もらふ職人も居て

読みあきし通勤車内吊広告

バスケットから猫の声する

花の下携帯電話かけながら

列を整へ遠足の子等

新宿も様変わりして荷風の忌

道楽の果床下の金

地動説三世紀経て破門とけ

インクは何時もブルーブラック

糖尿病高血圧に緑内障

何が出るやら闇汁の中

チューしてとテレビの様に言ってみる

アッシー君も今は暴君

尺取の如く話をなぞる爺

海霧ひたひたと覆ふ外風呂

名月の夜はざはめく池の面

ひとり静かに新走り酌む

呆け話つづく傘寿の秋あはれ

好きな絵飾る母のリビング

をさならにピアノ教へて生業に

うつらうつらと春の夢みる

丹精の花伯楽の実を結び

風光る中上る風の尾

平成四年十二月三日

於 梶が谷房連庵

弘 亭 麻 弘 麻 世 弘 遊 世 和 弘 和 弘 麻 遊 弘 和 麻

歌仙 十二月

式田和子捌

登るべき坂の多さや十二月

火鉢にくべる反古いろいろ

船のベル閑として鳴る冬波に

ジーンズはきし児等の遊べる

待宵に天金の書を繕きて

虫の隠れる戸袋の内

異邦人集へる聖母生誕祭

ロングヘヤーの陰のウインク

夫々に違ふ夢みて逢引し

留守録聞くが何よりの趣味

排気煙残し車の去りてゆく

青芒分け一陣の風

猫又の睨む暑月のなまこ堀

地蔵詣の講に積立

マスターの解説付のアメリカン

カップは伊万里リモージュもあり

城跡の花の大樹の根もあらは

鶯の音を真似る口笛

床上げの父が物書く春炬燵

揺れる『朝日』に割れる『角川』

ラグビーの突進力を売り込んで

自己矯正のビデオ購ふ

鹿おどし我に返れる山の宿

耳朵の感触指にありあり

上気する甘き体臭まとひつき

裁きの庭へ深き編笠

石柱にアンモナイトのあるといふ

BGMにピッコロの曲

月の出を待ちて酌み合ふ吟醸酒

嬰籟として栗拾ふ婆

継子てふ一茶の心身に入みて

ひとにはやらぬ釣りあげし鯉

アラームの思はぬ時に響くなり

税申告の長き行列

花までと家の普請を急がせて

都忘れを窓際に置く

平成四年十二月十七日

於 桃径庵

雄 和 志 悟 志 一 雄 同 悟 一 和 志 一 雄 志 悟 一 悟

大暑

秋元正江 捌

新宿の連句はじめの大暑かな

日傘ゆらゆら一列の隊

園児みな小鳩のやうに声あげて

サンドイッチに添へしピクルス

山峡に桂男をふり仰ぎ

芒原から白い柔腰

勝相撲力いっぱいしがひ締め

おろしやは悩む金か領土か

ウオッカを浴びるほど飲み酔ひもせず

柱のかげで欠伸する僧

寒猿の里におりくる親子連れ

葉かかへて着ぶくれの月

飛び乗りし汽笛の長き終列車

たくあんのよな妻に従ひ

香水のよぎりし刻をすかさずに

仕立屋銀次ちよいとかすめる

夢の間の六十年が折返し

閉ぢたピアノに春埃積む

薄べにを溶かせしごとき花の雨

入りし北国曲水の宴

平成四年七月二十五日

於 新宿滝沢

秋の風

中田あかり 捌

街中の古き鳥居や秋の風

飛石にさす十六夜の月

金柑の甘くなるほど睡たくて

宿題全部父のするなり

お風呂場でアルキメデスの浮力説き

探し求めしBカップブラ

ゆきずりの恋ばかりなり反省す

成吉思汗の馬蹄響きぬ

ふるさとの母のかつきし炭俵

しもやけの手をそつとなでなで

エンデバーふわつと地上に降り立ちし

ドライシエリーでまづは乾杯

殻を脱ぐ如く男をとりかへて

夏の布団に残るしわくちや

胡弓弾く物干し台に月涼し

いつか来た道デジャブ現象

沖繩に住みて兵士の行くを見る

岩海苔を取る婆の一团

廃村に伝説の花残りをり

揚雲雀消ゆ真青なる空

平成四年九月二十六日

於 牛込原町天祖神社社務所

秋時雨

秋元正江 捌

秋時雨わかもの街まぎれこむ

芒と月の衣飾る店

やまどりを提げたるひとの牧閉ぢて

会の報せをワープロで打つ

海嘯の近づく床に横すわり

衿足の香のふつと漂ひ

あぶな絵で評価さだまる浮世絵師

赤と青とが重なつてゐる

カクテルをおかないバーで冷酒酌み

陶の狸にバラソルを挿す

どこ迄も階つづく那智大社

快気祝ひの古い父の歩よ

ふたりゐる古き写真をそつと見ぬ

ゆたんぼ要らぬ君の体温

冬の月自転車で肉運ぶらん

均等法はバイトにもあり

舟出して過ぎし半生顧みず

春場所棧敷増える外人

花の山西郷像を包み込み

浅鯛炊き込みよく光るめし

平成四年十月二十四日

於 東郷神社内 水交会

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六―三  
(電) 三六三―一―四四八

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)

日時 第二・四土曜  
午前十時～十二時  
新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三三四四―一九四一(代表)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜  
午前十時～十二時  
新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三三四四―一九四一(代表)

＊猫養会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
会場 江東芭蕉記念館  
江東区常盤一―六―三  
(電) 三六三―一―四四八

雁帛往来

▽十二月一日 「季刊連句」三十九号届く。  
發送。

▽十二月六日 深川芭蕉記念館で一三八回  
連句教室。

▽十二月十二日 A・C・C、連句の歴史  
について講義。

▽十二月十三日 柏連句会、十六名出席。  
四卓に分け二十韻興行。

▽十二月十七日 電通連句部納めの会、築  
地の館屋で忘年会。

▽十二月十九日 千葉のA・C・Cで「芭  
蕉の恋句」(三回目)講義。

▽十二月二十四日 角川書店「俳文学大辞  
典」の原稿提出。

▽十二月二十六日 鶴の会に出席。

▽一月六日 「俳壇年鑑」原稿「平成四年  
の連句界」を書く。テレビで皇太子妃内  
定のニュースあり。慶祝。

▽一月九日 A・C・C「冬の日」「狂句  
木枯の」の巻を講義。

▽一月十日 柏連句会 十三名出席。三卓  
に分け二十韻興行。

▽一月十三日 湘南連句会うらら会の招待  
で鎌倉行。二十一名出席。三卓に分け興  
行。

▽一月二十日 猫養会初懐紙五十名出席。  
八卓で歌仙興行。

▽一月二十一日 電通連句部初懐紙。

▽一月二十三日 A・C・C「猿蓑」「市  
中は」の巻講義。

季刊「連句」第四十号

平成五年三月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方  
電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七―五二―三三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六―一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

B6判

三三二頁

三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使える  
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思ひなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編

二三〇〇円

## 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

二八〇〇円

## 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

二八〇〇円

## 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモツグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典

B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典

A5 白石大二編  
B6 白石大二編

国語慣用句辞典

B6 林田忠雄編  
B6 林田忠雄編

国語史辞典

B6 井上以知編  
B6 井上以知編

日本語語源辞典

B6 井上以知編  
B6 井上以知編

京都語辞典

B6 井上以知編  
B6 井上以知編

擬音語擬態語辞典

B6 天沼寧編  
B6 天沼寧編

隠語辞典

B6 実美編  
B6 実美編

近世上方語辞典

A5 前田勇編  
B6 前田勇編

花柳風俗語辞典

B6 藤井宗哲編  
B6 藤井宗哲編

新語俗語辞典

B6 榎島忠夫他編  
B6 榎島忠夫他編

難訓辞典

B6 中山泰昌編  
B6 中山泰昌編

名乗辞典

B6 荒木良造編  
B6 荒木良造編

名数数詞辞典

B6 森謙彦編  
B6 森謙彦編

あいさつ語辞典

B6 奥山益朗編  
B6 奥山益朗編

新版 ことば遊び辞典

B6 鈴木紫三編  
B6 鈴木紫三編

類語辞典

B6 鈴木・広田編  
B6 鈴木・広田編

類義語辞典

B6 徳川・宮島編  
B6 徳川・宮島編

表現類語辞典

B6 藤原与一他編  
B6 藤原与一他編

新版 文章表現辞典

B6 神島・村松編  
B6 神島・村松編

東京堂出版

101 東京都千代田区神田錦町3-7

電話 03-3233-3741~2